マッス共闘の「反戦旗派」活動を粉砕せよ!

明治大学に学ぶ、全ての学友諸君。

1/12、和泉地区に於ける反帝戦線と情況派との党派斗争、6・23和泉地区団交委結成をめぐる学内諸戦線の分裂・混乱を早急に克服・止揚し、7/15北熊本現地へ、総力をあげて決起する事が我々に向われている。

そのために、我々は以下に於いて

1) マッス共闘との問題
2) マッス共闘に対する自己批判要求
3) 和泉地区斗共闘の更なる強化と、学苑会の団結へ向けて

の三点を明らかにし、原則的な共闘関係を、和泉本校地区に於いて形成する基盤を定めて明らかにして行きたいと考える。

西部地区反帝戦線
中部地区反帝戦線

1月情況派との党派斗争を契機とした、所謂マッス共闘に対する「恫喝問題」を巡って、明大(和泉地区、本校)に於ける一連の諸経過に対して、我々の、マッス共闘に対する関係は、共闘関係を凍結した状態をあったとしても、非和解的な敵対関係としては把えてこなかったわけである。 しかしながら、この間のマッス共闘の一連の姑息な対応を鑑た場合、我々は、党派として重大な決断を下さざるを得ない。すなわち、マッス共闘とは、今後共闘関係の出来ない、非和解的な、敵対的な関係に入ったと云う事である。別の言い方をするならば、この悪質ノンセクト=マッス共闘を粉砕しなければならないと云う事である。

1) マッス共闘との問題(「恫喝問題」について)

この問題については、我々はすでに中・西部の両地区反帝戦線の統一見解として、「恫喝と受け取られたならば、自己批判的に総括をとりうる」と云う内容を明らかにしてきた。そして、その事の当否ではなく、単に言葉の上でのものとしてすませてきたためにも、明大に於ける大衆闘争の発展・構築と云う形に於いて為てきた。すなわち、神田に於いては、4・26〜28、5・15の工政自によるバリスト、5・13武装遊撃戦の貫徹、工政自による学部団交の要求として、又、和泉に於いては、西部地区反帝戦線の領導の下に、和泉地区斗共闘の革命的展望をもって、更には、7/15派兵阻止へ向かって大衆闘争の構築として為して来たわけである。 しかしながら、こうした我々の一連の斗いに対しては、何ら触る事なく、それはかりか「明大新聞」の5/13斗争に関する記事の内容に於いては、権力を批判すると云う形式をとりつつも、その実、5・13闘争に対するケチ附けを行う、闘争そのものへの敵対と云う、全く許す事の出来ない事を行っている。この事は、マッス共闘の「自己批判要求」なるものが、大衆闘争の発展を目指して行なわれているのではなく、ただただ、明大における主流派として位置してきた、反帝戦線憎しとばかりに、政治主義的、反戦旗派活動を行っているものとなんら変わり様がない。我々は「恫喝問題」に関しては、すでに見解を述べて来たわけであり、又、その事を物質化して来た事は、この間の我々の闘いによって一目瞭然である。従って、すでにこの問題に関しては、解決の方向が与えられているのであり、マッス共闘を中心とした「自己批判が足らない」などと云うのは、身の程知らずと云うものである。

2) マッス共闘に自己批判を要求する。

a. 生協和泉支店の「鍵」についてのデッチ上げ記事

デマ新聞=「明大新聞」ー280号の記事の内容にある「戦旗派が、鍵をもって行った」と云う、事実無根の記事に対し、我々は一貫して否定して来たのであり、訂正を要求して来た。にもかかわらず、「明大新聞学会」はこの件に関し何一つ事実を調べようともせず、唯一方的に、情況派のデマ宣伝に基づいて、誤てる記事を掲載して来たのである。しかしながら4月の生協理事会に於いて、前原理事が「自分は戦旗派に鍵を盗られたのではない」と云う「明大新聞」の記事が全くのデッチ上げである事が、完全に暴露された。この件について、学苑会執中会議の席上、「明大新聞学会」の[illegible]委員長も又、これ、責任をもって謝罪して、見解を表明すると云っておきながら「梨の礫」であった。我々は、かかるデマ記事を掲載した「明大新聞学会」=マッス共闘を、もはや許す事はできない。「明大新聞学会」=マッス共闘は、即刻自己批判すべきである。

b. 5/13闘争に対するケチ付け

5・13武装遊撃戦に関する「明大新聞」の記事は、誰れが読んでも明らかに、我が共産同・戦旗派の5・13斗争を中傷する目的のために書かれたものでしかない。ここで、我々は、新聞の言論の問題に関して述べておくならば、我々は決して、一般的に記事の内容についてとやかく云うものではない。しかしながら「明大新聞」の5・13闘争に関する記事については、それが、権力に対して闘い抜いた者を[illegible]エンすると云うのではなく、何故しら、権力を賞美し、権力と最も非和解的に闘い抜いた戦士を冒涜する様な形でしか書かれてはない事が問題なのである。 これこそ[illegible]が好んでやるところの、権力に闘ったものを罵倒し、その背後からたたくと云うやり方と一体どこが違うのであろうか。我々は、こうした「明大新聞学会」=マッス共闘の5/13闘争への敵対を、誹謗、中傷を、起訴された79名の戦士と、家裁へ送られた30名の戦士にとって代り、燃えたぎる怒りをもって弾劾するものである。「明大新聞学会」=マッス共闘は5・13闘争へのケチ付け=敵対を、即刻自己批判すべきである。

c. 6月23日、和泉における戦旗派排除策動に関して

この間、和泉に於いては、「和泉斗共闘」から逃亡した情況ノンセクト=マッス共闘は、神田に於ける反戦旗派策動、学苑会学生大会に於ける、工政自執行部を中心とした[illegible]になって、反戦旗派[illegible]するものや、今度は[illegible]和泉に於いて、反戦旗派[illegible]の全て[illegible]中部[illegible]反帝戦線、和泉地区斗共闘[illegible]会)[illegible]その[illegible]の役割を果して[illegible]に対しては、何一つ主体的にかかわる事もせず、ただただ学団主義的に固まり、しかも1月以来、一貫して反戦旗派活動を、自己の売りものにして来た、かかる腐敗分子を我々は断じて許す事は出来ない。従って、我々は、マッス共闘が和泉に於いても、斗共闘を排除した形で、大衆闘争を分断しようとした事に対して、自己批判を要求するものである。

C、以上述べたマッス共闘の反戦旗派活動に対し、我々はマッス共闘の全面的自己批判を要求するものである。

(3) 和泉地区斗共闘の更なる強化と、学苑会の団結へ向けて

我々は、この間の明大に於ける大衆運動の問題に関して、諸戦線が、ただ単に反戦旗派活動を行うに止まらず、明大学費闘争、派兵阻止闘争に関する、具体的な方針の提起と実践に依って止揚・解決を計って行くべきである。我々は、明大学費闘争に関しては学生会中執・学苑会を領導し抜き、文字通り明大における主流派として反帝戦線の総力をもって闘い抜く決意でいる。我々はその為には、全ての闘争委員会、サークル、諸個人が闘いに決起する事を訴える。しかしながら、その場合に踏まえておかなければならない事は、前項で述べた如く、マッス共闘は共闘関係の対象にはなり得ない事、非和解的な関係でしかない事は自明の理である。だが我々は、その他のノンセクト等に関しては、その様には必しも考えてはいない。すなわち、マッス共闘以外のノンセクト、とりわけ、べ平連、入管闘に関しては、次の事に関し、和泉地区斗共闘の会議に参加して、見解を明らかにする事を要求するものである。

(1) 斗共斗の内部に反帝戦線のメンバーが居る事をもって「恫喝問題」で更なる自己批判をしなければ団交委に参加させないとの事に関して、それは「党派組織と大衆組織」の二重構造の誤りである事

(2) 斗共闘との意志疎通を欠いたまま、それとは相対的に、独自に団交委をつくり、斗共闘・和泉学友会の闘う学友を排除しようとした事。しかもそれは大衆運動の分断である事。

(3) 結論的に云うならば「団交委」は斗共斗の下に組織されねばならない事

以上の三点について、べ平連、入管を始めとする、斗共闘と伴に闘おうとする部分は、自己の見解を述べなければならない事。

我々は以上の事について、和泉地区斗共斗の会議の席上で、討論する事を呼びかけるものである。そして、その事が明大に於ける大衆斗争の発展にとって必要不可欠な前提であると考えている。